

## SPECIAL FEATURE 01



規格建築部会長

**森田 俊作**

大和リース株式会社  
代表取締役会長

新年明けましておめでとうございます。2025年もあつという間に過ぎ、2026年となりました。皆さまは健やかな新年を迎えたでしょうか。

年頭にあたり、被災にあわれた皆さまに心よりのお見舞いを申し上げます。昨年2月の岩手県大船渡市で起きた林野火災は3,370haと、たった1件で、これまでの年間延焼面積の5倍近くの大規模火災がおきました。その後も100haを超える山梨県大月市や長野県上田市、愛媛県今治市、岡山県岡山市と立て続けに発生しました。

また9月5日には、静岡県牧之原市で台風15号の影響から「トルネード・アウトブレイク」という耳慣れない表現をされた、観測史上国内最大級の竜巻(JFE3.75m/s推定)により、2,000棟近い住宅が損壊する事態となりました。この原稿を書いている12月9日には、昨夜遅くに観測された青森県東方沖の地震の最大震度は6強と聞き、気象庁の観測史における震度7を超える地震は1995年の阪神・淡路地震から登半島地震まで7回ほどしかなく、その後の発表に耳を澄ませる一夜となりました。どれも異常気象のなせることですが、どんな有事にも備える団体として“一隅を照らす”思いです。

一方、世界総選挙といわれた昨年は1月の米国を筆頭にカナダ、ドイツ、韓国の国のリーダーが交代、よもやの我が国日本も交代となりました。日経平均株価は前年に付けた過去最高の株価を大きく上回り、5万円の大台に乗りました。前評判では危惧の声が多くたつた「大阪・関西万博」もいつの間に?という表現がピッタリの“ミヤクミヤク大人気”で無事盛況のうちに終えたようです。本当に予測が困難な時代になりました。

プレハブ建築協会も新会長を迎える体制となりますが、“流れに掉さずなけれ”的教えどおり、変わらぬ体制を維持しながら、防災DXをさらに進め、スフィア基準に基づいた避難所とのスムー

ズな移行の在り方やデータに基づく複数の自治体との同時被災訓練や多国籍化・高齢化・障害者対応などのインクルーシブデザインの考えをより進めてまいります。

また、災害発生後の迅速かつ大量の応急仮設住宅供給を実現するためには、都道府県の平常時からの検討や事前準備が極めて重要です。具体的には、建設候補地の選定、候補地台帳の整備・更新、気候風土に応じた建物仕様の検討、配置計画の作成などが挙げられます。当部会は、全国の都道府県との意見交換を通じてこうした準備を支援し、協力体制の強化を図ってまいります。また、現地会員会社による応急仮設住宅建設の対応訓練も不可欠です。これらの訓練を継続し、災害発生時の対応力をさらに高めてまいります。

2026年は、こうした取り組みをさらに深化させる年にしたいと考えています。予測困難な時代だからこそ、変化を恐れず、しかし足元を見失わない姿勢が求められます。社会の安心・安全を支える存在であり続けるため、技術革新と人間中心の設計思想を両輪に、未来に向けた挑戦を続けてまいります。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。